

エムポックスについて

栃木県東健康福祉センター

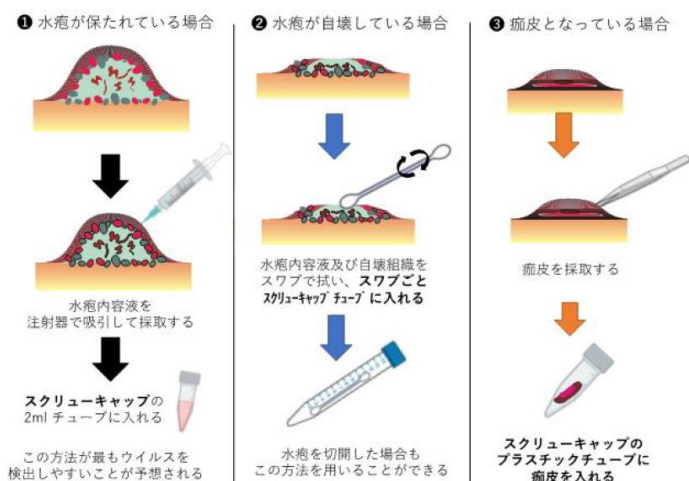
エムポックスを疑う臨床的なポイント

- ① **皮疹（特に性器や肛門付近）**：異なる段階の皮疹が同時にみられることがあります。
- ② **発熱やリンパ節腫脹などの全身症状**：全身症状がみられないこともあります。
- ③ **性交渉歴や海外渡航歴がある**：性交渉のあった相手がエムポックスと診断されたことで受診する場合があります。

エムポックスが疑われる場合

① 皮疹がある場合は検体採取

局所の皮膚病変別の検体の採取方法



- 可能であれば、検体は2カ所以上で採取してください。
- 採取した検体は冷蔵で保存します。
- 皮疹がない場合は鼻咽頭ぬぐい液等で検査を行いますが、陽性割合は低くなります。

- ② **保健所に連絡**：採取した検体は保健所が回収し、県保健環境センターで遺伝子検査を実施します。（この時点では届出の必要はありません）
- ③ **届出**：検査結果は2～3日で判明します。エムポックスは4類感染症であり、患者もしくは無症状病原体保有者を診断した場合はただちに最寄りの保健所への届出を行う必要があります。

感染対策

- ① **主な感染対策は接触予防策と飛沫予防策**：皮疹や痂皮、浸出液などと直接的に接触しないように注意してください。また、痂皮や浸出液で汚染された衣服やリネンなど、物品を介した感染にも注意が必要です。（空気感染は確認されていません。）
- ② **検体採取時等の予防策**
 - 患者に接する場合は、N95 マスク、手袋、ガウン、目の防護具を着用します。
 - 診察はなるべく換気が良好な部屋で行ってください。
 - 手洗い、アルコールによる手指衛生を頻回に行います。
 - 患者が使用したりネン類は診断が確定するまでなるべく触れずに管理し、診断が確定してから適切な処理を行ってください。

患者対応

- ① **病態**：多くの場合は軽症であり、2－4週間で自然に治癒しますが、入院を要する場合もあります。
- ② **重症例**：次のうち、少なくとも1つの状態がある場合
 - ・直腸出血などの出血性病変
 - ・皮膚病原の数が多く（100個以上）癒合している
 - ・ウイルス性敗血症、細菌性敗血症の合併
 - ・エムポックスによる脳炎・脊髄炎、眼球または眼窩周囲の病変
 - ・その他（入院を要するエムポックス又はその合併症による病態がある場合等）
- ③ **ハイリスク例**：次のうち、少なくとも1つの状態がある場合
 - ・免疫不全（CD4陽性リンパ球数 $200/\mu\text{l}$ 未満のHIV感染症、白血病、悪性リンパ腫、全身性悪性腫瘍、固形臓器移植患者、原発性免疫不全症、免疫抑制剤（アルキル化剤、代謝拮抗薬、腫瘍壊死性因子阻害剤、高容量のステロイドなど）
 - ・小児（12歳未満）
 - ・妊娠中・授乳中
 - ・重度の皮膚疾患（アトピー性皮膚炎など）
- ④ **他の性感染症との重複感染**：他の疾患と診断がついてもエムポックスの同時感染は否定できません。エムポックス以外の疾患として治療介入後も病変が改善しない場合はエムポックスを疑う必要があります。

治療

- ① **特異的治療薬**：
 - ・日本では、現時点（2023年5月末）で利用可能な薬事承認された特異的な治療薬はなく、対症療法が原則となります。
 - ・欧州や米国等で承認されている天然痘治療薬テコビリマットは、エムポックスにおける有効性も示唆されています。
 - ・現在、国内で発生したエムポックスの患者に対してテコビリマットを投与し、安全性・有効性を評価する臨床研究を国立国際医療研究センター病院等において開始されています。（テコビリマットの服薬を希望する患者に対しては保健所から臨床研究について案内します。）
- ③ **ワクチン**
 - ・天然痘ワクチンはエムポックスの患者との接触後に発症・重症化を予防する効果が期待されています。
 - ・エムポックスの患者と接触後（暴露後）4日以内にワクチン接種すると予防効果が14日以内にワクチン接種を行うと重症化効果があるとされています。（CDC 2021）
 - ・日本で生産されている天然痘ワクチン（LC16 ワクチン）については、2022年8月にエムポックスに対する適応が追加承認され、現在国立国際医療研究センター病院において、エムポックスの接触者に対してLC16 ワクチンの接種を行ったものを対象に、安全性・有効性を評価する臨床研究を実施しています。ワクチンの接種を希望する接触者については保健所から臨床研究について案内します。